

## 2. 「寺院の無住化と墓じまい

### - 無縁化する墓と墓じまいへの対応」

山田慎也（国立歴史民俗博物館）

#### 1. 研究目的

高度経済成長期以降、地方では過疎化の進展により人口流出が続き、近年の少子高齢化の進展によってその状況はさらに加速している。そのため、従来の葬送儀礼を維持できなくなっており、新たな対応に迫られている。

しかし、このような寺院や墓の対応は、個々の置かれた状況や関係当事者のあり方で異なっており、文化的な動態を把握し現代人の死生観を考える上で、具体的な実態を捉えたモノグラフは極めて重要である。そこで本調査は、和歌山県南端部といった地方の過疎地域の事例を取り上げ、死者祭祀の実態を捉えるものである。

昨年度は、山間部の寺院の調査を行ったが、今年度は沿岸部漁村地域の動態を把握することを目的とする。

#### 2. 地域の概要

和歌山県串本町、古座川町は、紀伊半島南端部に位置する。阪神圏からも中京圏からも鉄道では特急で3時間半のところに位置し、まだ現在では高速道路も届いていない。さらにかつて主要な産業である林業と水産業も疲弊しており、山間部のわずかな農業ももともと主産業とはなりにくい状況であった。なかでも漁村である串本町古座地区は、水産業の低迷で、とくに主たる産業がないまま過疎化が進行している状況である。

#### 3. 漁村地域寺院の調査

古座川の左岸河口部に位置する和歌山県串本町古座地区は、紀伊半島の特徴として山地が海岸部や河岸部まで迫っているため、河岸と海岸にそって街道が通り、その道沿いに住宅があるため、細長い街を形成している。地区の人口は、536人、世帯数277世帯（2010年国勢調査）であるが、1993年当時は988人であり、過疎化の進行は他の地域同様急速に進んでいる。

古座地区は江戸時代には古座村、古座浦といわれた藩政村であり、紀州藩直轄の鯨方がおかれ漁村として発達した。明治期には捕鯨会社なども設立されたが、戦後は沖合、沿岸漁業に移行し、魚商や魚加工業など、漁業関連の職業も多かった。しかし、1980年台になると、漁業も燃料高や不漁なども重なって不振となるとともに後継者も不足し、地域経済も低調となった。

しかし近世、近代の繁栄によってであろうか、この村をおもな檀家とする、浄土真宗本願寺派善照寺、浄土宗阿弥陀寺、曹洞宗青原寺の三ヶ寺があり、地域の人々に支えられていた。これら寺院の宗派はそれぞれ異なっていたが、昭和40年代までは、お互いに葬儀の折には、役僧となったりそれ以外にも諷経といて、関係の深い家の葬儀では、導師と一緒に読経したりと、寺院どうしの交流も多かった。そのため、お互いの宗派の読経はある程度行うことができるほどであったという。

#### (1) 無住化と離檀

いずれもこの3ヶ寺の住職は1995年当時にはいたが、2000年代になると住職がいない寺院が生じてくる。もっとも古座川上流では、すでに無住化が進展していたが、沿岸部は住民もある程度は在住していたため、住職がいる寺院が比較的あり、こうした住職が古座川上流の寺院を兼務していた。

こうしたなか、2000年代になると、曹洞宗清原寺の住職が90歳を超えても住職を務め、葬儀や法要なども従来通り行っていたが、その後高齢のため亡くなった。そして住職の親族が後継として住職に就任した。また浄土真宗善照寺は現在でも住職は健在であり、後継者もいる。しかし、浄土宗阿弥陀寺の住職は、病気のため2000年に亡くなった。まだ60歳代の若さであったが、後継者がいないため、病气中から法務を依頼していた串本町有田の正覚寺が兼務することとなった。

当初、阿弥陀寺の葬儀や法事の依頼は地元檀家総代を通して依頼していた。そして阿弥陀寺の宗門の賦課金は地元檀家で負担した。しかし、次第に寺檀組織も弱くなっていき、葬儀や法要の依頼は、総代を通さず檀家が直接正覚寺に依頼するようになった。さらにまた盆の施餓鬼会なども阿弥陀寺では行わなくなっていく。

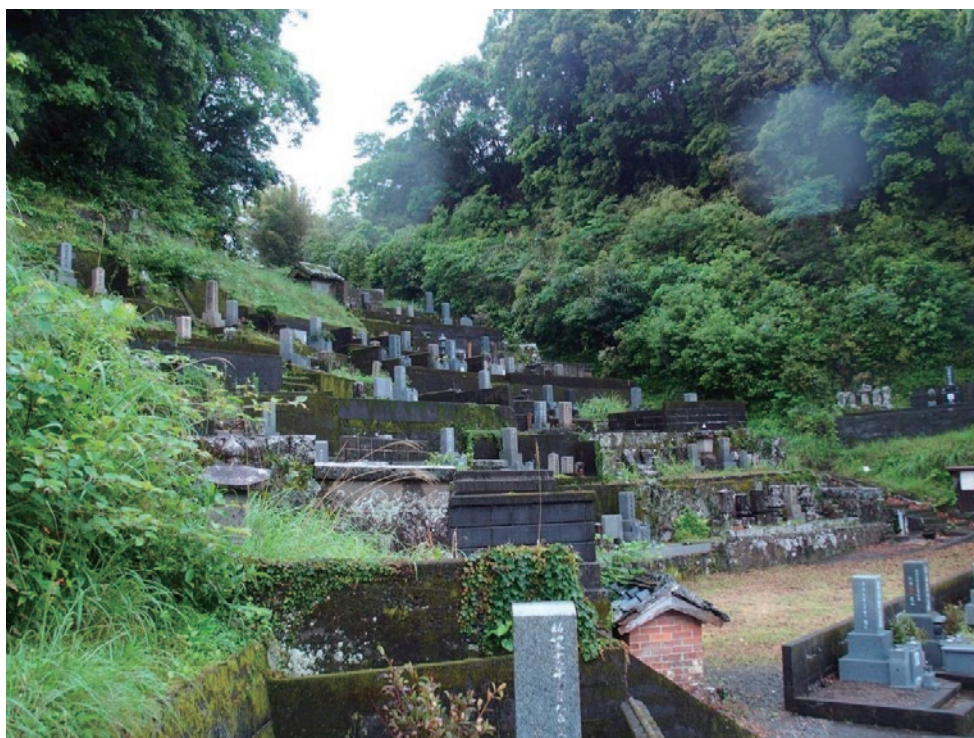
かつては、8月12日に迎え施餓鬼といい、施餓鬼会が行われ、このときに檀家に配られる施餓鬼幡をもらって仏壇前の盆棚に飾って迎え盆としていた。そして15日には、初盆の家をおもな対象として山門施餓鬼が行われ、初盆の家は切子灯籠を寺に持っていき明かりをつけて法要を行った。この明かりは初盆の精霊そのものであり、その後、浜で盆踊りが行われるが、この灯籠を浜にもっていき、その前で盆踊りをするので、故人の霊を慰めるのであった。

こうした盆の施餓鬼会が行われなくなり、阿弥陀寺としての行事は、現在、総代が作った施餓鬼幡を阿弥陀寺で配布して終わっている。こうして兼務住職が阿弥陀寺を訪れることはほとんど無く、宗教者の関与がなくなっている状況である。

住職のいたときには約150軒の檀家があり、そのうち地区内が90軒、地区外に60軒ほどあったという。しかし、2016年現在では、54軒に檀家は減少している。そして総代制度も高齢化と檀家の減少により弱体化しており、その引き継ぎも十分な体制では行われていない。こうして次第に外部の檀家はそのまま関係が途絶え、また地区内の檀家も離檀する家も生じており、次第に阿弥陀寺の寺檀組織が弱体化しているのである。

## (2) 住職と永代供養墓

基本的に古座地区の寺院は、境内墓地がなく、地域の外れにある中の谷の墓地と右東谷の墓地、および背後の上野山に墓が点在していた。これは生活空間である村の外側に位置するものであり、その境目となる墓地の入口、例えば一本松の浜や焼香場といわれる場所、背後の上野山につながる寺院の庭、といった空間が、死者の領域である墓との間にあり、葬儀が行われる場所であった。しかし、墓は山地にあり、かなりの階段や坂を登っていくため、高齢者が増えてくると墓参がかなりの負担になっていった。



(右東谷の墓地)

こうしたなかで、1998年に、善照寺が合葬式共同墓を寺院境内に建立した。善照寺は古座地区だけでなく、周辺地域に檀家を持つ浄土真宗寺院である。善照寺は、雑賀衆といわれる中世紀北にいた一党の末裔とともにやってきて創建された寺院といわれ、古座川流域の雑賀衆の子孫とされる旧家の家々も檀家になっている。

この善照寺だけは、本堂が街中にあり、それ以外の阿弥陀寺、清原寺は、階段を100段ほど上がった上野山に、街を見下ろすように建っている。また善照寺は真宗寺院であるため、本山納骨なども盛んであり、境内に納骨用の合葬式共同墓を設置することもそれほど抵抗なかったものと考えられる。こうして善照寺は当初檀家であった人々を対象として共同墓に埋蔵していった。こうしたなか、階段を上がることなく、容易に参拝できるということで、檀家以外の人々も次第に注目されるようになっており、こうした人々も受けつけ

ようになってきたのである。そして同じ念仏系の宗派でもある浄土宗阿弥陀寺の檀家であった人も、ここに埋蔵を希望する人も出てきたのであった。

善照寺の住職によれば、従来の檀家寺院住職から離檀の承認を受けた人であれば受け入れることにしているという。こうして、檀家に限らずさまざまな人々が永代供養を目的として合葬式共同墓が使用されるようになり、祭祀を承継する人のいない人や都市部に出てしまい、地元の墓を整理する人などがこの合葬式共同墓に埋蔵されている。



(善照寺の合葬式共同墓)

### (3) 家による継承の途絶

永代供養墓がこの地区にできたことにより、従来から墓をどのように維持するか、さらには整理するかなどといった選択肢が広がったことになる。地区を離れた人やその地に住む人々でも、高齢によって斜面にある墓にお参りできない人は、従来、親戚などに管理を依頼したり、時には便利屋などに頼んだりした。しかし、便利屋を頼めば費用が掛かり、親族でも義理が絡むことであり、負担になる場合が多かった。

こうした中で、善照寺の合葬式共同墓が注目されたのである。ここでは善照寺の合葬式共同墓に改葬したある家の事例を取り上げたい。

#### M家の事例

M家は古座地区の隣、中湊地区に在住し電気機器販売業を営んでいる家である。3年前

に中湊区にある自家の墓を整理し、善照寺の合葬式共同墓に改葬した。この点についてM氏（女性 60 代）に伺った。

Q 何故改葬したか？

私が善照寺にしたかった。ここは分家なのよ。大阪の伯父さんが本家で、そこは娘さん二人で、嫁に行ったからね。串本の叔母がね、（本家となる伯父さんの）妹がね、串本にあった家を守っていたのよ。年取ってきたら、こっちもようせんから、私もこう（病気になり足が不自由になる）なったでしょう、お墓へよういかなから。

大阪のほうで永代供養にしようかと話になって。これ幸いに私のところも、正法寺さんはお坊さんいないから、あれやから、子供たちに負担かけたくないでしょ。子供ら遠いから、大阪の伯父の娘さんと話して、お墓を大阪に持って行くよりも、古座の善照寺さんにいれてもらったほうが、うちの父と叔父と、本家の人たちといっしょに入れるからと言うことで、それが一番やっていうことで、そいで一気に、ね、

M家は分家であり、M家本家の子孫は、女性二人で両人とも嫁いでM家姓を継いでいなかった。そして大阪と神戸に在住している。この姉妹も高齢になってきたため、墓を大阪に移動するか検討していたところ、古座の善照寺に合葬式共同墓があることをMM氏夫妻から聞き、M家本家の墓を改葬して善照寺に合葬し、従来の墓を廃止することとした。それまでM家本家の墓の管理は、M家が行っていたのである。

MM氏は数年前に脳血管系の病気で倒れた。懸命の療養とリハビリによって足に障害を残してはいるが、日常生活を送れるまで回復した。ただし従来のように階段を上ったの墓参や掃除は難しくなった。そこで、本家が改葬するのを機会に、自家の墓も改葬し廃止することとした。M家は本家とも中湊地区の臨濟宗妙心寺派正法寺の檀家であり、正法寺背後の斜面に墓があった。この墓地は地区の共同墓地となっており、正法寺檀家以外の墓もあり、たとえば善照寺檀家の墓も多い。正法寺は、昭和 50 年台に当時の住職が亡くなる、無住寺となり田原地区の同宗同派檀那寺の住職が兼務するようになった。

こうして菩提寺は無住であり、自身の墓参が難しく、またM氏夫妻は長女、長男がいるが、それぞれ東京と岐阜に在住しており、その負担が大きいため、善照寺に合葬することにしたというのである。

Qいつ改葬したのか？

三年前。世話ないよー、世話無いわー、まずそれやわ。子供たちにも。善照寺さんのお墓いったら、（埋葬している人が）多いでしょう。

実家も善照寺やった。善照寺さんでよう遊んだ。（善照寺の住職の）一番下の妹、兄弟と私が同級生、また（住職の）息子さんとR（M氏夫妻の長女）と同級生でね。

わたしとこはね、仏様は、正法寺はお釈迦さんを、阿弥陀さんにかえてね、仏さんを祀

ってる。兄とこは（M家本家）、仏様大阪で祀っているみたい。

父親をうめて30年、何もなかったし、絵を描いたりするの好きだったんで、お墓へパレット等も入れたが、それは残ってた。麻の袋に土をいれて、善照寺さん、（遺骨は）土にかえるから気にしなくてもいい。本堂でお経を上げてもらって、お墓にに入れて拜んでもらった。

改葬をしたのは3年前であった。改葬の一番の理由は、「世話ない」つまり自らにとっても子供にとっても、負担が少ないことであるという。さらにMM氏自身は、古座の善照寺の前に実家があり、実家は善照寺の檀家であるとともに、学校や日常生活も含めて住職家族とも懇意であり、善照寺が身近な存在であったことも大きい。

そして、M家は地元に住んでいるので、善照寺の檀家となった。そのため仏壇に祀っていた臨済宗の本尊である釈迦如来を、浄土真宗の本尊である阿弥陀如来に替えて、現在仏壇に祀っているという。この地区では、火葬骨を骨箱に入れて土に直接埋葬するため、改葬のため墓を掘ったときには父親の遺骨がでなかったという。そこでその土を麻袋にいれ、遺骨の代わりとして、善照寺本堂で法要を行い、合葬式共同墓に入れたという。なお、本家は、位牌を大阪の方で祀っており、大阪で臨済宗の僧侶に依頼し、法要を従来から行っていたといい、今回の合葬に際しても善照寺の檀家とはならなかった。

#### （4）家的継承の途絶と合葬墓

従来の死者祭祀においては、寺と檀家という仕組みが必要であり、そこでは住職の存在が大きいことを改めて認識することができる。そして住職もまた地域社会の一員であったからこそ、死者祭祀が続いてきたのであり、兼務住職ではその点に限界があることが上記の調査からも把握できる。

また祭祀の継承は子供がいても、女性の場合、どうしても実家の祭祀を次世代に継承することが難しいことがうかがえる。こうした点で男系男子で嫁入り婚といった家的認識が祭祀の断絶にむしろ機能していることは皮肉な結果であろう。

さらに男性の子供がいても、現在十分に祭祀が難しい場合には、合葬式共同墓に移行していることがわかる。その背景には墓の位置などさまざまな条件があるが、基本的には従来の墓は維持できないし、その際には宗派の違いはほとんど意識されないという傾向が、現在のこの地域の動向として見ることができ、この意識傾向は、ある程度日本の現状を示しているものと考えられる。